

「ポーランド文化史講義ノート」

土谷直人

一九八四年度の『東欧文明第三講義』は「ポーランド文化史——ポーランドの国民性をめぐって——」と題する講義を行なっているが、講義資料の一端を活字にしておくのも意味のないことではないと思われるので、ここに紹介しておきたい。学生諸君・卒業生の中にも、あるいは諸先生方の中にも、ポーランド文化に興味を抱いて下さる方々がおられると信ずるからである。また、この種のものが日本語で読めない現状から、訳出しておくことも無駄ではあるまいと思うからである。

そもそも、ある国民の文化や思想や感情の理解は、その国の人々の語った言葉に耳を傾け、彼らの歌った歓喜の歌を楽しみ、彼らの歌った悲しみの歌を味わなければ、本物とは言えないであろう。例えば、古代ギリシアの思想を知るとは、ソクラテスやプラトンの語った言葉から、彼らの対話をしているアゴラの様子、対話の話し振り、精神の躍動等々が眼前に彷彿として現われることではないであろうか。以下のポーランド人の書き残した片言隻句から、彼らのそうした情景が少しでも読者が想像出来れば幸いである。

今回は、神話・伝説と歴史の間を取り扱うことにし、資料とし

て、非常に素朴なスラヴ民族間の関係及び、その建国を示す『ポーランド・チェコ・ロシア建国伝説』、建国にまさるとも劣らない意味を持つ『ポーランドのカトリック・キリスト教受容（九六六年）伝説たる『ミェシュコ伝説』、それに外国人による初めてのこの国の見聞記、すなわち、ガル・アノニム（一ゴール人、現代風に言えばフランス人某）による『ポーランド年代記』（十一—十二世紀）の一節と、十五世紀最大の歴史家ヤン・ドウゴシュによる『光榮あるポーランドの年代記』（一四八〇年）の一部を紹介したいと思う。

(一)

ポーランド民族の由来、その国家の起源については、日本民族の由来やその国家の起源同様、不明確な点が多い。最初にスラヴ世界を当時のヨーロッパ世界に紹介したのは大ブリニウスであろうか。彼は紀元一世紀に次の様に書いている。「ある人々は、ヴィストウラ（ヴィスワ）河までのかの地には、サルマート人、ウエネート人、スキール人、ギル人が住んでいると報告している」。また、かつて、支配層たるシュラフタ（土族）階級は、己の出身

を、カスピ海の西、黒海の北岸付近にいたとされるサルマート人の子孫と考えて、サルマチア主義を唱えたこともある。現代の史学の標準的な考えによれば（例えば、一巻本の科学アカデミー版イェジィ・トポルスキ編『ポーランド史』を見よ）、およそ青銅器第二期（紀元前一五〇〇—一二〇〇）頃に、現代のポーランドの北西部にはヴェネート人が、南東部にはいわゆる西スラヴ人が、そして北東部にはより古くから原バルト人が住んでおり、長い年月をかけて次第に、ヴェネート人と西スラヴ人が統合・一体化したようである、と考えられている（同書35ページか。）

現代歴史学の教えているのは以上の通りであるが、古代スラヴの素朴な伝説は次の様にポーランド・チェコ・ロシアの建国事情を語っている。この伝説にも、一片の、民族の情念的・心理的眞実は宿っているかも知れない。これはグニェズノのゴディスワフ・バシユコ（十三世紀の人、生没年不詳）のものであらうとされる『ヴェルコポルスカ年代記』の一話であり、原題は『レフ・チエフ・ルスの伝説』と名づけられている。

『ポーランド・チェコ・

ロシア建国伝説』

千年以上も昔、ダニューブ河河口近くにあつた土地を支配していたある王がいた。その王が死んだ時、王の財産は三人の息子の手に委ねられた。父の小さな領域が、兄弟の間で分割するには充分な大きさでないと知った時、三兄弟はたいそう悲しんだ。各々

が支配することを望んだが、三人全てが同じ王位に就くことも出来ないばかりか、彼らの間で分割するほど充分な領土もなかった。お互いに戦うよりも、彼らの要望を満す充分に広い他の領土を探そうと兄弟は決めた。彼らは旅立ち、見知らぬ土地を経て、多くの危険やさまざまな種類の野生動物、物騒なへびや野蠻な人間たちに出合った。

道を歩きながら、兄弟のうちの一人が、上の方を見つめた。彼は上空高くに三羽の鷲を見た。最初、彼は鳥など珍しくも無い風景であり、無数の鳥が四方八方、あらゆる高さを飛んでいたことについては何とも思わなかった。彼を悩ませたものは、鷲たちが彼ら兄弟についてくるという事実だった。兄弟はこの出来事について冗談を言い合つた。

「僕は白い鷲を選ぶよ」と最年長のレフが言った。

「僕は黒鷲を選ぼう」とルス。

「じゃあ、僕は残つた鷲をとらねばならないね」とチエフが

声高に言った。

旅の間中、彼らはこの鳥たちの選択に時を費した。

ついに、三兄弟は扇の軸のように分れた三叉路にやって来た。

一つの道は元来、彼らが旅を続ける予定であつた北に向つていた。もう一つの道は北東へ向かい、三つ目の道は北西を指していた。

「どの道を行こうか？」と重要な問題を決めるために彼らが歩みを止めた時に一人が聞いた。

「僕はずっと、真つすぐ行くよ」とレフが言った。

「僕も又、同じ方向に行こうと思っていたんだが」と他の兄弟が言った。

「そんなにすぐ、別れなくてもいいじゃないか、まあ、ちょっと待てよ」

彼らが、ああでもない、こうでもないと検討していた時に、レフは自分の選んだ白鷺が北への道を飛んでいるのを見、取り残された二羽の鷺はそれぞれ他の分れた道の方向へ従っていた。

「君の鳥はあっちだよ」とレフがルスに右へ飛ぶ黒鷺を指し示しながら言った。

「僕の鳥が真つすぐ行くから僕もそうしよう。後は各自、自分の好きなようにすればいい」とレフが続けた。

「それでは、僕は僕の鳥について行こう。きっと、それは僕たちに幸運をもたらしてくれるだろう」とルスが答えた。

三兄弟は慈愛のこもった挨拶をして別れた。ルスは後に、彼自身で名付けたロシアという国まで、黒鷺について行った。

チュフはボヘミアの国へ来たが、後にチェコスロヴァキアとして知られるようになった。何故なら、その住民はチュフの子孫だからである。

そして、レフに関して言えば、彼は広々とした平原まで北へ行き、そこに住みついた。彼の道案内は白鷺だったので、その鳥を独占し、象徴として使うことに決めた。このようにして、ポーランドは国旗に白鷺を用いるようになった。

レフはポーランド語で“Pola”という広大な平原に住みついた。

そして、レフは彼自身の名前を加えて“PoLech”という言葉を作った。時には“Lach”とも書かれた。このように“Po-Lachy”あるいは、仲間うちで呼んでいるような“Polacy”という言葉が出来た。彼らは平原に住みついたレフ族の人々であった。

年代記編者は、三兄弟——レフ、チュフとルスが彼らの間で激しい闘いをし、和解のために、ヴァルタ河畔で会ったと私達に伝えている。彼らは漁民が住んでいた一つの島を見つけ、レフが止まった場所に彼は町を築いた。この講和会談 (Pomnie) という意味から、この町はポズナニと呼ばれた。

このように伝説は私たちに、千年以上も前に、どのようにしてポーランドが建国されたかを伝えている。

(二)

次に紹介するのは、ポーランドにおいて実在の確認できる最初の君主である、ポラニ族の首長、ピヤスト家のミェシュコ一世 (在位九六〇—九九二) にまつわる伝説である。彼は九六〇年頃に、ヴァルタ川流域の現在のポズナニ付近で国家形成を行なったらしい。

彼が、妻のドゥブラフカ (ボヘミア王ヴラティスラフ一世の娘) の導きによって、ポーランドに西方からのキリスト教を導入したことは重要な意味を二つ持っていた。一つは隣国ドイツの侵入を防ぐのに都合が良いという政治的判断をミェシュコがしたことであり、もう一つはポーランド文化の方向付けを西欧志向とし

たことである。ちなみにこの故にまたスラヴ音をラテン文字で表記したために、*Polak* (プシュ)とか*Polen* (シチュ)とかいった日本人を初めとする外国人には馴染みのないスペリングがポーランド語に現われることになったのである。

現代にもみられるポーランド人の西欧志向は実に、この時代から始まっていたと言つて良いだろう。一九六六年には、建国にも匹敵する、このカトリック教受容一千年を祝つて盛大な記念祭が催された程である。

『ミエシユコ伝説』

ポーランドのジェモムイスウには、後に偉大で名声高くなつたミエシユコという息子がいた。ミエシユコは、少しばかり外国風に響く名前でも知られたポーランド最初の君主であつた。つまり代々の年代記編者はダーゴという名で彼を呼んでいる。彼はポーランドをキリスト教化したことにより名声を博した。

ミエシユコは生まれたとき盲であつた。特に彼は美しく聡明な子供だったので、両親はひどく悲しんだ。彼は澄んだ薄いグレーの瞳だつた。少年はしばしば自分の前方を空虚に凝視してゐた。人はじつと見て始めて、彼の目には視力が無いと分つたのであつた。

ミエシユコは他の少年たちのように走ることはもちろん、遊ぶことも出来なかつたので、母親が語ってくれる物語を聞いている間中、彼は母の傍に座つて、自分の犬の耳を撫でていた。それら

の物語は、彼の父や祖父の勇敢な業績や、彼の先祖・農夫ピヤストが二人の天使をいかに保護し、親切にもてなしたか、邪悪な王ポピェルとその妃が、いかにねずみに喰われたか、いかにグニエズノが建てられたかという話だつた。ミエシユコはこれらの話に決して飽きることはなかつた。そして、何度も何度もこれらの話を語つてくれるよう頼んだ。

ミエシユコの七才の誕生日が近づいた時、彼の父は国の高位高官たち全員を集め、習慣通り、息子を祝して催されるべきパーティーに関する意見を聞いた。ジェモムイスウは盲の息子のためのこのような式典を行なうのを好まなかつた。というのは、彼は息子が苦しんでいるのが恥かしく又、痛ましかつたからである。高官たちは王を説き伏せ、式典が行なわれる手はずがととのえられた。ミエシユコはこのパーティーに興味をそそられた、というのも、彼の好きな音楽があるだろう。彼は客たちの笑い声や陽気な騒ぎを聞きたらうし、彼の父が約束してくれた蜂蜜酒を味わうことも許されるだろう。少年はこの素晴らしい日を期待した。

パーティーのために着飾る時がやって来た。彼の年老いた乳母は彼が上機嫌なのに気づいた。彼は乳母にきつと何か素晴らしいことが彼に起こるだろうと話した。少年は母の手に導かれて、城の大広間へ入つて行つた。彼は白のベルベットの外衣を着せられ、長ズボンは金で刺しゅうがしてあり、額には金のバンドがあつた。この若い少年は椅子に導かれて座り、全く静かに音楽を聞いてい

た。ジェモムイスウは悲しい気持ちで少しの間、少年を見守っていた。

広間ではダンスが行なわれた。フルートやシンバルの音楽は楽しく甘美であった。優美に動いている踊り手は明るい色の常に變化する模様をなしていた。突然一人の夫人が、ミエシュコが立ち上り、非常な喜びの表情で踊り手を見つめているのに気がついた。彼女は踊りの相手から離れ、少年の方へ歩み寄った。少年はうれしげに彼女を見てほほ笑んだ。

「僕は見えるよ」と彼はささやいた。ミエシュコの母親は本能的に息子に何かが起きていることに気付き、急いでやって来た。一見して彼女は真実を悟って、ミエシュコを腕にかかえ抱きしめた。廷臣の何人がジェモムイスウの所へ知らせに走った。彼らは王が一人で少年のことに思いを馳せながら手で頭を抱え込んで座っているのを見つけた。

「王様、王子の目が見えるのです」と彼らは告げた。ジェモムイスウはするどく彼らを見て、「何と言ったのだ」と彼らに尋ねた。家臣たちはくり返したが、ジェモムイスウは彼らを信じなかった。彼は怒り出した。というのは、彼らが王をいらだたせたのである。

「父親の気持ちを翻弄するな、息子は盲だし、これからもそうなのだ」と彼は怒りながら言った。しかし王妃がやって来て、笑いながら同時に泣いて彼の胸に飛び込み、

「あなた、ミエシュコの目が見えるのです。行って、あなた

にお見せしたいの」と言った。彼女は彼の腕をとって、少年の居る所へ彼を連れて行った。ミエシュコは父親に気付くと、父の名を呼んだ。見たこともなかった居並ぶ廷臣にも気付くと、父の名を呼んだ。

ジェモムイスウは息子の目が見えるようになったことを確信した。彼の喜びは大きく、居並ぶ臣下の喜びも大きかった。ダンスが非常な活気を帯びて再び始まった。パーティーは若いミエシュコの健康を祝して何度も乾杯を上げるに相応しかった。ミエシュコは蜂蜜酒を初めてぐいと飲み、その後、眠気を感じベッドへ連れて行かれた。

この奇跡的な治癒は、ジェモムイスウと彼の全廷臣とを感動させた。君主はこの宮殿にかしづいているいく人かの老賢者たちに、この出来事の意義が何であるかと意見を求めた。これは何か特別の意味があるのか、ミエシュコがこの国の歴史において重要な役割を果たすよう運命づけられているのかと。老賢者たちは、じつくりと頭をしぼり熟慮していたが、遂に、一番年とった、最も賢い老人が次のような説明をした。ミエシュコを苦しめていた盲目はポーランドを苦しめていた盲目の象徴であった。彼が現れるまでポーランドは盲であったが、ミエシュコを通してポーランドは見え、啓蒙され、他の民族の上に立てるであろう。この説明はジェモムイスウに神秘的な事件として残り、そして彼は結局、この出来事を解釈できなかったけれど、ポーランドの啓蒙化は老賢者の予言通り本当に起ったのである。

視力が回復した後、ミエシュコは騎士として、王子としての教

育を受け始めた。彼は力強く、何物をも恐れない人間に成長し、儀式のあらゆる作法に秀で、そして彼はやさしく賢かった。彼には普通若い人には稀な理解力と直観力があつた。この特性は恐らく彼が決して忘れることのない目の見えない悲しい日々から培われていた。彼は良き素直な息子だつた。彼の父が死んだ時、彼は父の死を嘆き悲しみ盛大な葬儀をもつて埋葬した。

ミエシュコは九六〇年から父に代わつて統治した。彼は勇敢な君主だつた。彼はポーランドを侵略しようとする攻撃的な隣人たちと多くの戦いをして、それら全てを破つた。彼は侵略者たちを押し返し、彼らの土地を占領し、彼の支配のもとにポーランドは強大な統一国になつた。ミエシュコはまだ異教徒であつた。そして、異教徒の習慣によつて、七人の妻を娶つていた。

ミエシュコがチエコスロヴァキアの王女であり良きクリスチャンであるドゥブラフカに出会つた時、彼は恋に落ちた。彼女は美しく善良であつた。ミエシュコは彼女と結婚したいと望んだ。ドゥブラフカはミエシュコの愛に答えたが、彼女は彼が異教徒と七人の妻を放棄し、クリスチャンになるまでは彼を受け入れることを拒否した。ミエシュコはしばらくの間ちゅうちよしたが、ドゥブラフカへの愛は他の全ての考慮すべき事柄よりも勝るものであつたから、彼はクリスチャンになることを快諾することを宣言した。彼は七人の妻を放棄し、新しい宗教を信奉する準備をした。チエコスロヴァキアの王女は承認されたポーランドの王妃として、ポーランドへやつて来たが、彼女は立派な司教と司祭を従えてや

つて来た。そして、ミエシュコが洗礼を受けるまでは正式な夫であることを認めなかつた。ドゥブラフカは自らミエシュコに教授し、彼女の訓練のもとにミエシュコはゆつくりと、確実にキリスト教の教義を身につけ、遂にはカトリック教会に受け入れられるまでになつた。彼の洗礼式はりつばな式典として催された。この式典は何年も前に彼の視力が回復したまさに、その大広間で行なわれたのである。

ドゥブラフカの影響のもとに全てのポーランドは、この王の例に倣つてキリスト教を信奉した。

このように、ミエシュコの目の見えないのは、ポーランドの無知の象徴であるという老賢人の予言は的中した。この時までポーランドは異教信仰の誤つた道を歩み続け、ミエシュコと彼の妻の影響のもとに真実の神の崇拜の光を見、かくして、真に偉大で啓蒙された国となつたのである。

(三)

外国人がある国を観察して、印象を書きとめておく——これは常に興味深いことであるが、次の文章は、外国人の書いたポーランド国見聞記のうちで最も古く、かつ有名なものである。筆者はガル・アノニム(ラテン名ではガルス・アノニムス)で、十一、十二世紀の人。フランスのプロヴァンス地方出身でハンガリーを経由して、修道僧としてポーランドにやつて来て、ボレスワフⅢ世(口曲王、一一〇二—一一三八在位)につかえたものと推定さ

れている。古代史を概説し、ポレスワフ王の一一一三年までの事蹟を詳細に書き記している。次に最も有名な個所を引用しておく。

『ポーランド年代記』

この国はほんとうに森林が多い国であるがまた少なからず金と銀、パンと肉、魚と蜂蜜に富んでおり、とりわけこの点において他国より秀れているのである。従ってこの国は、上に挙げたような多くのキリスト教国、異教国に囲まれており、また何回となく一時にすべての国々から、あるいは一国づつ各々から攻撃を受けたにもかかわらず、どの国にも完全には征服されたことがないのである。この国の空気は健康的であり、耕地は肥沃にして、森は芳香を発し、河川湖沼には魚が多く、騎士は勇猛、村人は勤勉、馬は耐久性に富み、雄牛は喜んで耕作に従事し、雌牛は乳に富み、羊は毛がふさふさしている。

(四)

最後に、ヤン・ドウゴシュユによって書かれた『光栄あるポーランドの年代記』（一四八〇年）から二箇所を日本語にしておきたい。歴史家あるいは年代記筆者としてはもちろん、前述のゴティスワフ・パシユコヤ、クラクフの司教であったヴィンツェンティ・カドゥーベック（約一一五〇—一二二三）が先行するわけであるが、しかし、真に歴史家と呼べるものは彼をもって嚆矢とする。つまりポーランド民族は、十五世紀に至って遂に民族としての自

覚と誇りを持つようになったと言つてよいだろう。ドウゴシュユ（一四一五—一四八〇）の略歴を紹介しておく、この十五世紀最大の歴史家は、二八年から三一年までクラクフ大学に学んだ後、クラクフ司教の秘書・文書起草官になり、ここで古文書を見る機会を得、後にK・ヤギェロインチック王に近づき、彼の息子等の教育係、及び外交官として活躍し、チェコやハンガリーにも使節として赴いた。主著の『光栄あるポーランドの年代記』（原文はラテン語）全十二巻は、神話時代から一四八〇年までのポーランド史を取り扱い、五五年から八〇年まで執筆された。全部印刷されたのは一七〇一—〇二年のことであつた。

次に引用する最初の一文には、ポーランドの主要都市の成立事情が書かれているが、中心となるクラクフは、日本のいわば京都にあたり、一〇〇〇年に大司教座が置かれ、一五九六年に首都がワルシャワに移る前まで、長期に渡つて首都の座を占めた都市である。

第二の文章は、ポーランド人の国民性・性格・氣質が描かれているが、ドウゴシュユは自国民の欠点に対しても目を塞いでいないところが興味深い。

『光栄あるポーランド王国の年代記』

ポーランドの諸都市

ポーランド人とポーランド王国に属している土地にある都市のうち、より重要で、より価値のある都市を列挙しよう。すなわち、

ヴァヴェル城下のクラクフはヴィスワ河の浅瀬に Crakchus が建設したものであり、Crakchus の G の文字が K に子音交換をしたために、名前はクラクフ (Krakow) となった。ここは、ポーランド王公の子供たちの生誕及び遊びの地であり、キリスト教洗礼の地であり、ここには彼ら一族の遺骸が高価な素晴らしい廟の中に残されている。場所の適切さと周囲の見晴らしの良さからして、クラクフはポーランド第一級の城であることは論争の余地がない。クラクフは王都として、又、司教座のある都市として誇っており、三つの町に分かれている。中央地区はクラクフと呼ばれ、まさにここにヴィスワ河に囲まれて、岩の多く、またかなり高い小山の上に城がそびえ、それは古くからヴァヴェル城と呼ばれている。

この城は岩の上に建てられ、多くの場所でかなり険しい絶壁があり、城壁・宮殿・塔・その他の防御建物が王冠状に配置されている。王城内には王の本拠と殉教者故スタニスワフ及びクラクフ司教の遺品を納めた墓と、多くの聖人の聖骨・遺骸・それに遺物の記念に献げられ、その上、キリストの釘・聖バプテスマのヨハネのあご、殉教者聖フロリアンの聖体に献げられた切出石造りの大聖堂がある。

第二の町、カジミエシュを南部地区にポーランド王カジミエシュ II 世が建設し、自分の名前を与えた。この町はまた、前述の殉教者故スタニスワフの殉教の地としての榮譽を与えられた。ここには町民の住宅よりも修道院の建物の方が多く、ここに建てられた聖フロリアン教会の名前からフロレンツィアという名を受取

った。この教会の建立が完成する以前にそう名付けられたのであり、この町を建設したのは前述のポーランド王カジミエシュである。クラクフという都市は、多くの利点を持っていたけれども、あらゆる隣国、すなわち、ハンガリー、チェコ、モラヴィア、ロシア、ポドリア、リトワニアから等距離に位置しているという利点によつてはなはだ有名である。そして、これらの国々から実に様々な加工商品がここに送られたり、また転送されていくのである。更にここは、大学、王の戴冠式、誕生、洗礼、葬礼、また四つのコレギウム教会で有名である。クラクフは城壁建設及びその足場を作るのに必要不可欠な石、木材や他のあらゆる建築用原材料を近所に豊富に持っている。その上更に、クラクフとカジミエシュの町の城壁の真中にヴィスワ河が流れており、この河は必需品すべての運搬に耐える航行可能な河川である。最後に程遠からぬ所に偉大な諸民族の国境があり、何よりもまず、お互いの関係がこの都市へ彼らの多くの代表者たちを引き寄せていた。

次はグニエズノである。これは実際そうであるというよりもグニエズノ (巢) という名前から第二の首都であり、現在の輝きよりもむしろ過去の栄光で称賛されており、もしも首座大司教聖堂がなければ、多くの人々に忘れ去られてしまったであろう。これはレフのポーランド人すべての都市の生母である。何故なら、ここに初めてレフが家族と親類を引き連れて定住したからである。それから、レフはここに王の居城と都市を建設し、この都市は諸事件のその後の発展により「巢」と名付けられたが、その事自体

にはむしろ幸福感を味わなかった。何故なら多くのポーランド都市が誕生した時に、自身は疲弊してしまつたからである。ここは土地が瘦せているにもかかわらず、最も幸福なことは、プロシヤから殉教者聖ヴォイチェフの遺品を司教座聖堂に運び込んだことである。

次はポーランド第三の都市ルヴフである。ハリーリッチからここに「首都を」移した功績はポーランド王ヴワディスワフ三世に属する。この都市は、市の高台にそびえている二つの城で有名である。レヴウ海を通り、ルヴフまで陸路で運ばれたありとあらゆる産物がここにはある。陸路で運ばれるのは、通常、都市の利益を多に増す船舶航行可能な河がここにはないからである。

次はボズナニで、ポーランド初期の王様たちの居城、居住地、それに宮廷であり、また彼らの休息の場所でもあった。司教座の榮譽を受け、ヴァルタ河の水で灌漑され、修道院の建物で知られている。

次にヴロツワフ。ポーランド公ミェチスワフによつて建設され、この公の時代に初めてポーランド人は異教の神々からキリスト教に帰依したのであり、司教座聖堂を持ち、聖なるコニンの殉教者一同の遺品と、見事な美的様式で建築された、聖人を祭る教会を持ち、そして最後にこの都市の周囲をグッタルス河が流れていることで有名である。

ポーランド人気質

ポーランドのシュラフタ（士族）階級は榮譽を求め、戦利品に貪欲で、危険や死をもとめせず、約束は守らず、臣下や地位の低い者にはきびしく、言葉は軽率で、身分以上の出費をかさね、君主には忠実で、農業や酪農に従事し、見知らぬ者や客人に親切で、客を歓待すること厚く、この点において他の民族の先を行くのである。ところが、村人は酒はよく飲み、口論はするわ、悪態はつくわ、あげくの果は殺人を犯し、わが国の国民以上に、家庭内殺人や傷害事件で汚点を残している国民を見つけ出すのは難しいことであろう。この国民はいかなる仕事、重荷にもひるむこともなく、酷暑と空腹に同様に耐え、迷信と偏見に突進し、同様に獲物に貪欲で、悪意につき動かされ、新しものがり屋で、衝動的にかつ外国物に旺盛な食欲を示すのである。家を建てる熱意に乞しく、貧弱な小屋で満足し、大胆不敵さに欠けることもなく、抜け目がなく、人を信用せぬ知力を持ち、動作や物腰は美しく、他の国民に比べ体力で勝り、身長は大柄で高く、健康な体を持ち、身体各部は器用で、髪の毛は金髪と黒髪が混じっている。このひどい空気、厳しい大気、酷暑の天空、容赦のない暴風、長く降り続く雪、永遠に氷結した山頂——これらすべてがポーランド人の性格と知性を形成したのである。よそ者及び外国人には、たとえ明らかに才能があり、良風美俗が備わつていようと、役所の指導的地位に就かせることは稀であり、恐らく時が経過したり、あるいは一世代の後になって、たとえ彼らの子孫がそうした地位に就くことがあつても、それが羨望をひき起こさないことはめつ

たにあらわす。

『使用参事文獻』

- 1 П. Петров, В. Гюзелев. Христоматия по история на България. Наука и Изкуство. София. 1978.
- 2 Jerzy Topolski. Dzieje Polski. PWN. Warszawa. 1977.
- 3 Kazimierz Hartleb. Kultura Polski. PWRKSZ. Lwów. 1938.
- 4 Sigmund H. Uminski. Tales of Early Poland. Endurance Press, Detroit, Michigan. 1968.
- 5 B. Suchodolski. Polska i Polacy. PWN. Warszawa. 1983.
- 6 J. Krzyżanowski. Dzieje literatury polskiej PWN. Warszawa. 1979.
- 7 J. Maślanka. Literatura a Dzieje Bajeczne. PWN. Warszawa. 1984.
- 8 Wielka Encyklopedia Powszechna. PWN. Warszawa. 1962—70.

〔付記〕

キエがあと述べたように、以上はすべて、「ポーランド文化史」の講義資料用に筆者が訳出したものであり、講義の第一回及び第二回目に取扱ったものの一部である。一応出典を以下に記して置かたう。

- (1) 『ポーランド・ナホロ・ロミン建國伝説』の原題は “The Legend of Lech, Czech and Rus” と前掲の『使用参事文獻』の4の“九十七ページから一〇〇ページまでの全訳”
- (2) 『“ハナハロ伝説”の原題は“The Legend of Mieszko”

と題し、前掲同書の五五ページから六一ページまでの全訳。

(3) 『ポーランド年代記』の原題は “Anonim tzw. Gall, Kronika polska. 前掲の『使用参事文獻』の5の“一一三ページの全訳”。

(4) 『ポーランド王国の年代記』の原題は “Jana Długosza Roczniki czyli Kroniki sławnego Królestwa Polskiego(1455—80)” と “ポーランドの諸都市及び諸国” が、前掲同書の一一四ページから一二六ページ五行目までの全訳、“ポーランド人氣質”が、一六〇ページから一六一ページ一行目までの全訳である。

(一九八四年十二月)